（報告）

基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思い

大久保ひろ美[1)]　稲垣順子[1)]

要　旨

本研究の目的は、学生の陰部洗浄技術習得に向けた基礎看護学実習での指導方法を検討していくために、本学基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思いを明らかにすることである。

データ収集方法として研究参加者である看護学生５名に対し半構造的インタビューを実施した。逐語録より看護師の指導に対する学生の思いが語られた文脈を抽出しコード化、分離、再編をしながらカテゴリー化した。

分析結果として【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】、【患者への適切な方法を学べる指導だった】、【方法の根拠について説明が欲しかった】【学生が主体的に実施できる指導だった】、【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】、【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という６つのカテゴリーが抽出され、学生の思いをふまえた実習指導の示唆が得られた。

キーワード：　基礎看護学実習　陰部洗浄　看護学生　思い

Ⅰ．はじめに

基礎看護学実習は、学内での講義や演習で習得した基礎的な知識や技術、態度を統合し、対象者に対する看護を展開する初めての実習である。すなわち、各看護学領域の実習で発展させ展開・応用できるための基盤を学ぶ機会であり、看護実践能力を養う導入の場として看護基礎教育において重要な位置づけにある。

本学基礎看護学実習Ⅱは２年次前期（７月）の基礎看護学実習Ⅰに続いての後期の開講科目である。学生は、受け持ち患者との援助的人間関係構築を目的とした基礎看護学実習Ⅰでの学びを基盤とし、基礎看護学実習Ⅱでは２週間の実習期間の中で看護過程を展開し受け持ち患者の生活過程を整えるための看護実践能力を修得することを目的として実施している。入院患者の高齢化や重症化、入院期間の短縮化がすすむ臨床現場での本学基礎看護学実習Ⅱのここ数年の傾向として、床上での陰部洗浄を必要とする患者を受け持つ学生が増加している。看護師による受け持ち患者の陰部洗浄を見学した後、指導のもと学生主体で連日実施した学生の割合は履修学生の４割を超えている。

基礎看護学実習における陰部洗浄の技術経験状況について過去10年間の先行研究をみると、見学や経験がない学生の割合が５割以上と高い結果となっていたのは、岩根ら[1)]による報告のみであり、多くの研究報告[2)~6)]では見学または実施した学生の割合が履修者の５割以上となっていた。このことから、基礎看護学実習の段階より学生が受け持ち患者の陰部洗浄場面に関わる機会が多いことが推察できる。

本学における陰部洗浄の技術習得に向けての学内演習は、１年次後期に「便器を使用した陰部洗浄」の技術演習を実施し、患者役割と看護師役割を担うことでの臨場感を得ることや患者役としての羞恥の感情面の知覚から対象者の感情を想起できるための機会[7)]としている。また、基本技術の習得状況を確認するため評価項目を用いた技術確認を別途設定している。学内演習での陰部洗浄技術確認表を表１に示す。学生の習得状況をみると、十分な湯量と泡による再汚染を意識した洗浄が不十分であることや、適切なおむつの着脱や便器挿入に多くの時間を要する状況にある。

このような課題をもつ学生にとって、基礎看護学実習で受け持ち患者の陰部洗浄を実施することは、個別的な状況・状態に応じた根拠に基づいた実践と羞恥心へ配慮した関わりが必要となる。学生にとって陰部洗浄を実施することは緊張と戸惑いを生じ、

1）山梨県立大学看護学部　基礎看護学

陰部洗浄は、困難さを実感する援助技術[8]である。また、基礎看護学実習を履修する学生は患者への援助を実施する経験が少ないため、援助実施に伴う患者への危険リスクの予測や対応力に不足している。ゆえに、本学では、患者の安全性や安楽性に配慮し、学生にとっての臨床での効果的な学びとなるよう陰部洗浄の指導は看護師に依頼している。

学生が陰部洗浄の技術を習得していくためには、学内演習の学びを基盤とした臨地実習での指導が重要であるが、陰部洗浄に焦点をあてた臨地実習での指導に関する先行研究は少なく、水野・福田による教員を対象とした調査結果[9]のみであった。

そこで、受け持ち患者への陰部洗浄を実施する学生は、臨床での看護師による指導をどのように受け止めどのような指導を求めているのか、明らかにしたいと考えた。本研究により、学生の立場からとらえた看護師による指導内容とその方法について明らかにでき、本研究結果を実習施設と共有していくことで、基礎看護学実習での学生の陰部洗浄技術習得に向けた臨地での具体的指導方法について検討してくことができる。また、新人看護師への卒後教育の指導にも反映できる基礎資料となると考えた。

Ⅱ．研究目的

本研究は、学生の陰部洗浄技術習得に向けた基礎看護学実習での具体的指導方法について検討していくために、本学基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思いを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ．用語の定義

1．指導に対する思いとは、看護師の言動や行動を認知した上での指導に対するとらえ方や見方をいう。

2．臨地実習での陰部洗浄とは、臥床患者に対するおむつと尿とりパット上での泡洗浄による方法である。

Ⅳ．研究方法

1．研究参加者

平成29年度基礎看護学実習Ⅱの履修学生のうち、看護師による指導のもと受け持ち患者の陰部洗浄を実施した学生とし、「同意書」の提出があった学生のうち5名を研究参加者として選定することとした。

2．データ収集方法および分析方法

対象者からのデータ収集は、インタビューガイドを用いた半構造的インタビュー調査とした。インタビュー内容は、①看護師からの指導で良かった点、②看護師からの指導で辛かった点や困惑した点、③看護師の指導で患者の援助実施に活かせたこと、④看護師からどんな指導を求めたいかであった。

インタビュー実施日は、基礎看護学実習Ⅱの成績確定後の日時から事前に希望を確認し調整した。学生個人のプライバシーが確保できる学内の研究室や演習室を使用し、1名に対して30分～40分実施した。また、インタビュー内容は承諾を得た上でICレコーダーに録音した。

データ分析は、研究代表者と質的研究に精通した共同研究者と2名で行った。まず、対象者への承諾を得た上でICレコーダーに録音した内容を逐語録として作成し精読した。作成した逐語録については、個人が特定できないように番号に変えて表記した。逐語録の中で陰部洗浄についての看護師による指導に対する思いについて語られた文脈を意味あるデータとして文節ごと抽出した。得られたデータの分離、再編をしながら、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、研究者間で確認・修正を繰り返し、妥当性について検討を重ねた。

Ⅴ．倫理的配慮

本研究は、山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究倫理審査委員会からの承認（1725）を得て実施した。

研究対象者は実習を履修した学生であることから、研究協力依頼への強制力が働きやすい関係である。ゆえに、本研究の趣旨やインタビュー協力依頼に関する説明は、基礎看護学実習Ⅱ終了後の学内授業終了後の時間帯に、研究代表者より基礎看護学実習Ⅱの履修対象学生全員に対して口頭のみの説明方法とした。「インタビュー参加協力依頼書」および「同意書」と「同意撤回書」は、学生の自由意思により持ち帰ることができるように教室後方のスペースに置いた。また、インタビュー参加協力については強制するものではなく、あくまでも個人の自由意思によるものであること、同意の有無によって個人評価や実習成績評価に影響することは一切ないことを事前に伝え、「同意書」の提出場所は事務室前BOXを確保し、基礎看護学実習Ⅱ成績判定会議後の10

表1　基礎看護技術論Ⅱ　技術確認表

		評　価　項　目
準備	1	必要物品の準備ができる　（バスタオル、フェイスタオル、手拭き用タオル各１枚、シャワーボトル（温湯38～40℃）、ボディソープ付き不織布２枚、　泡流し用不織布１枚、ディスポーザブル手袋３双、ディスポーザブルエプロン、ディスポーザブルマスク、トイレットペーパー、防水シーツ、便器、便器カバー、医療廃棄用ゴミ袋（大）（小）、紙おむつ
	2	環境を整えられる（病室環境、ベッド環境、ベッド周囲の環境）
	3	防水シーツを適切な位置に敷くことができる
	4	ベッド上に洗浄用ガーゼ、紙おむつ、便器、医療廃棄用ごみ袋を準備できる（洗浄実施前：患者の体位を整えた後実施）
患者の心理と苦痛への配慮	5	説明を行い、同意を得ることができる
	6	バスタオルと綿毛布を使用した両下肢の保温ができる
	7	対象者のプライバシーに配慮できる（不必要な露出がない、声のトーン）
	8	対象者の身体的負担を最小限にした腰部や臀部挙上の介助と側臥位への体位変換ができる
	9	実施前・中・後、患者の心理に配慮した言葉がけができる
スタンダードプリコーション	10	ディスポーザブル手袋・エプロン・マスクの着用ができる
	11	汚染度を意識したディスポーザブル手袋・エプロン・マスクの外し方と適切な処理ができる
安全で確実な洗浄	12	正しい位置に便器を挿入することができる
	13	陰部洗浄のための体位とポジショニングをとることができる
	14	温湯が腹部や背部に流れないために恥骨上にフェイスタオルをあてがうことができる
	15	湯温が適切であるかを確認の上、正しい方向へ温湯をかけ流すことができる
	16	逆行性感染予防のための正しい順序で泡洗浄できる （女性：尿道口→膣口→小陰唇→大陰唇→恥骨上・鼠径部→肛門部） （男性：尿道口→陰茎大部→陰嚢→恥骨上・鼠径部→肛門部）
	17	十分な温湯（シャワーボトル２/３以上）で洗い流すことができる
	18	フェイスタオルで水分を十分に拭き取ることができる（便器を外した後の臀部の拭き取り含む）
	19	紙おむつを適切に着脱できる
片付け	20	使用した物品を汚染度を考えてワゴンに片付けられる
	21	汚染物を適切に処理できる
	22	実施後の環境を整えられる（病室環境、ベッド環境、ベッド周囲の環境）
状態観察報告	23	患者の寝衣等を整えられる
	24	陰部洗浄前・中・後に観察したことを報告できる 皮膚・粘膜の状態観察（発赤・発疹の有無、汚れと臭気の有無、痛みや掻痒感の有無）、全身状態の観察（気分不快の有無、倦怠感の有無、顔色、表情、言動等）

日間を提出期日とした。また、5名以上の「同意書」の提出があった場合は、「同意書」を開封しない状態で、無作為的抽出により選定することを「インタビュー参加協力依頼書」に明記した。

Ⅵ. 結果

1．研究参加者と受け持ち患者の背景

平成29年度基礎看護学実習Ⅱを履修した学生99名のうち、期日内での同意書の提出があった学生は5名であり、この5名を研究参加者とした。研究参加者と受け持ち患者の背景は表2に示す。

2．データ分析結果

基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思いについて分析した結果を表3に示す。

分析結果から、【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】、【患者への適切な方法を学べる指導だった】、【方法の根拠について説明が欲しかった】【学生が主体的に実施できる指導だった】、【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】、【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という6つのカテゴリーが抽出された。

以下、抽出された7つのカテゴリーについて、各カテゴリーを構成するサブカテゴリーと、データとして抽出された文脈からコード化した内容の一部を取りあげながら述べる。カテゴリーを【　】、カテゴリーを構成するサブカテゴリーを『　』、コードを「　」で示す。

(1) カテゴリー【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】

学生は、実習2日目～3日目に看護師の実施場面を見学し、看護師の指導のもと主体的に実施してきた中で、*「患者への具体的方法のイメージが難しく不安で戸惑った」*、*「見学した後でも自分でやろうとすると難しくて焦った」*など、その日の患者の状態をふまえ『患者に実施する難しさを分かって欲しかった』ととらえていた。

臨床では患者のおむつ交換の時間に合わせて陰部洗浄を実施することが多く、便失禁の患者の洗浄場面に遭遇することも少なくない。*「便失禁状態に慌てて思考と行動ができなかった」*、*「おむつ上で失禁した便の拭き取りは難しくて焦った」*など、精神的動揺が大きかった『便失禁状態での場面ではサポートが欲しかった』ことを振り返っていた。受け持ち患者に対して適切な方法で実施することを目標とした学生は、*「助言をふまえ考えてきた方法を活かせずに残念だった」*や*「物品の準備不足から患者さんに負担をかけてしまい悔やんだ」*など、『思うように出来ず後悔することを分かって欲しかっ

表2 インタビュー参加者と受け持ち患者の背景

インタビュー参加者	受け持ち患者に対する実施経験回数	受け持ち患者の背景			
		年齢　・性別	入院時の診断名	体位変換移動動作	排泄状況等
学生A	3回	80歳代・女性	脳腫瘍 片麻痺、失語症	全介助	一日のうち便失禁数回あり、全身状態や皮膚の状態から適時洗浄を実施
学生B	5回	60歳代・男性	肺炎、脳性麻痺	全介助	膀胱内留置カテーテル挿入中 午前中に多量の泥状便の失禁が多い。患者の体型も大きく洗浄には看護師2名を必要とする
学生C	5回	90歳代・女性	虚血性腸炎	全介助	膀胱内留置カテーテル挿入中 陰臀部にカンジダ症あり、洗浄実施時に軟膏処置を必要とする
学生D	4回	70歳代・男性	癌性腹膜炎による腹水貯留	全介助	膀胱内留置カテーテル挿入中 便失禁による患者からナースコールあり、洗浄を実施する
学生E	4回	70歳代・女性	C型肝硬変、腹水貯留	全介助	膀胱内留置カテーテル挿入中 洗浄中に便意を催し排便することが多い

表3 陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思い

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	代表的なコード
学生にとっての難しさを分かって欲しかった	患者に実施する難しさを分かって欲しかった	15	・患者への具体的方法のイメージが難しく不安で戸惑った(2) ・見学した後でも自分でやろうとすると難しくて焦った ・いろんな技術が必要とされ、自分にとって難しく一つの壁だった
	便失禁状態での場面ではサポートが欲しかった	11	・便失禁状態に慌てて思考と行動ができなかった(3) ・おむつ上で失禁した便の拭き取りは難しくて焦った ・便失禁状態での手順について助言が欲しかった
	思うように出来ず後悔することを分かって欲しかった	8	・助言をふまえ考えてきた方法を直接活かせずに残念だった(2) ・物品準備不足から患者さんに負担をかけてしまい悔やんだ ・看護師の急ぐ状況を知りつつ十分な洗浄ができず心残りだった
	自分のことで頭が一杯だったことを分かって欲しかった	6	・実施することに無我夢中になり状況が分からなくなった(2) ・パニック状態だったので清潔・不潔の区別ができなかった ・気持ちは舞い上がり、自分がやる事で頭が一杯だった
患者への適切な方法を学べる指導だった	臨床での方法を学べた指導だった	7	・患者の負担に配慮した看護師の方法を知った(3) ・臨床での方法を教えてもらえることが教員との違いだった ・ビニール袋を使った泡立て方法に驚いた
	患者への言葉がけを学べた指導だった	7	・看護師の意味ある言葉がけに自分との違いを実感した(2) ・看護師の言葉がけは患者を安心させる内容だった(2) ・患者の状態を気にかける言葉であると分かった
	患者に行う方法についての助言が具体的だった	7	・患者のバイタルサイン値と関連づけた方法の助言に納得した(2) ・患者の臀部の状態をふまえた洗い方を教えてくれた ・実施後に患者にとってのより良い方法を説明してくれた
	患者にとっての適切な方法を学べた指導だった	5	・臨床でみた方法が患者のためには良いと思えた(2) ・見学を通し患者にとっては看護師の方法が適切と思えた
	迅速に実施する必要性を学べた指導だった	5	・陰部洗浄と清拭をする援助行為の速さを実感した(2) ・看護師さんの手早さが印象的だった
方法の根拠について説明が欲しかった	洗浄に伴う行為の根拠を知りたかった	6	・陰部洗浄と清拭を同時にすすめる方法の根拠が知りたかった ・手袋を２双重ねて実施することの判断について知りたかった ・陰部に直接手が触れた洗浄方法に複雑な思いがした
	便器や防水シーツを使用しない理由が分からなかった	6	・臨床で何故便器を使用しないのか疑問のままだった(4) ・防水シーツを敷かない理由が聞けなかった ・尿とりパット上での洗浄では再汚染してしまうと疑問だった
学生が主体的に実施できる指導だった	患者に意図的に関われるような配慮があった	15	・患者と相談した時間に実施できるよう調整してくれた(3) ・患者の状態観察について意識が向けられるような助言があった(2) ・おむつや寝衣交換を学生ができるように介助してくれた(2)
	学生が上手くできるような介助や助言だった	11	・実施中に具体的に教えてもらえたので上手くできた(2) ・介助と助言があったので患者も自分も安心してできた(2) ・陰唇を十分広げられなかったことをその場で指摘してもらえた
	経験していないことへの意図的な助言と介助だった	6	・臨床で使用する物品の説明や確認があったので困らなかった(4) ・初めての尿とりパットの使用について助言してくれた(2) ・膀胱留置カテーテルの取り扱いについて発問し介助してくれた

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	代表的なコード
	患者にとっての洗浄目的や方法を考える時間を確保してくれた	6	・洗浄について自分で考える時間を与えてくれた(4) ・陰部洗浄の目的を保清以外の視点から考えていく動機づけがあった ・洗浄目的を考える機会があったので患者理解に繋がった
	学生が考えた方法を最優先してくれた	3	・看護師の洗浄方法をふまえ自分なりに考えた方法で実施できた
学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった	学生が質問しやすい雰囲気が欲しかった	14	・看護師のやり方に疑問があっても気が引けて聞けなかった ・自信がないので自ら助言を求めることは緊張した ・教えてもらったのにできなかったときはそれ以上聞けなかった
	指導は言葉にして欲しかった	8	・見守るだけの指導は緊張感が強くあまり考えられなくなった ・緊張感強い状況での看護師の無言は辛かった ・不安や緊張が増すのでもっと言葉にして欲しかった
	実施中に混乱した突発的な判断による指導だった	5	・留置カテーテル管理をするようにと急に言われ緊張が増した(2) ・泡洗浄中に突然お湯をかける看護師の行為に驚いた(2)
学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった	肯定的評価による助言が欲しかった	16	・良かったから次も頑張ってという言葉があった時は嬉しく頑張れた(2) ・改善点ばかりを指摘された時は落ち込んで嫌になった(2) ・できるようになったことを伝えられて自信に繋がった
	体験を次に活かせる助言が欲しかった	6	・その日の振り返りの助言もなく翌日に繋げられなかった(2) ・前日の助言からどう考えたのか実施前に聞いて欲しかった ・前日をふまえた助言があれば意図的に患者に実施できた
	実施状況をふまえた納得できる助言だった	5	・適切な体位保持方法であったかを一緒に振り返り納得した ・湯温が適切でなかったことを実施後の指摘により納得した

た』と振り返っていた。また、*「実施することに無我夢中になり状況が分からなくなった」*、*「パニック状態だったので清潔・不潔の区別ができなかった」*など『自分のことで頭が一杯だったことを分かって欲しかった』と、学内演習では経験していない患者への洗浄方法を実施していくことの難しさから、【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】という指導に対する思いを生じていた。

(2) カテゴリー【患者への適切な方法を学べる指導だった】

学生は、受け持ち患者の陰部洗浄場面での見学してきた経験を通して、*「患者の負担に配慮した看護師の方法を知った」*、*「臨床での方法を教えてもらえることが教員との違いだった」*と、『臨床での洗浄方法を学べた指導だった』ととらえていた。看護師の患者に対する関わりについて*「看護師の意味ある言葉がけに自分との違いを実感した」*、*「看護師の言葉がけは患者を安心させる内容だった」*と、『患者への言葉がけを学べた指導だった』ととらえていた。また、*「患者のバイタルサイン値と関連づけた方法の助言に納得した」*、*「患者の臀部の状態をふまえた洗い方について教えてくれた」*など、『患者に行う方法についての助言が具体的だった』という見方であった。

学内演習で基本となる洗浄方法を学んできた学生は、*「臨床でみた方法が患者のためには良いと思えた」*など、『患者にとっての適切な方法を学べた指導だった』ことや、*「陰部洗浄と清拭をする援助行為の速さを実感した」*ことで『迅速に実施する必要性を学べた指導だった』ととらえており、【患者への適切な方法を学べ

る指導だった】という思いを抱いていた。

(3) カテゴリー【方法の根拠について説明が欲しかった】

学生は、看護師による陰部洗浄の見学を通して、看護師が実施する具体的方法について、演習や文献からの知識との違いに気づき、*「陰部洗浄と清拭を同時にすすめる方法の根拠が知りたかった」*、*「手袋を2双重ねて実施することの判断について知りたい」*や、*「陰部に直接手が触れた洗浄方法に複雑な思いがした」*等、『洗浄に伴う行為の根拠を知りたかった』と振り返っていた。また、学内演習で習得してきた方法と異なるおむつ使用による方法について、*「臨床で何故便器を使用しないのか疑問のままだった」*、*「防水シーツを敷かない理由が聞けなかった」*ことで、『便器や防水シーツを使用しない理由が聞けなかった』など、実習中に疑問を解決できなかったことによる【方法の根拠について説明が欲しかった】という思いを生じていた。

(4) カテゴリー【学生が主体的に実施できる指導だった】

学生が受け持ち患者の陰部洗浄を実施するにあたり、*「患者と相談した時間に実施できるよう調整してくれた」*、*「患者の状態観察について意識が向けられる助言があった」*など、『患者に意図的に関われるような配慮があった』ととらえていた。実施中の看護師の指導については、*「実施中に具体的に教えてもらえたので上手くできた」*、*「介助と助言があったので患者も自分も安心してできた」*と、『学生が上手くできるような介助や助言だった』ととらえていた。また、*「初めての尿とりパットの使用について助言してくれた」*、*「膀胱留置カテーテルの取り扱いについて発問し介助してくれた」*など、『経験していないことへの意図的な助言と介助だった』こと、*「洗浄について自分で考える時間を与えてくれた」*、*「洗浄の目的を保清以外の視点から考えていく動機づけがあった」*など、『洗浄目的や方法を考える時間を確保してくれた』ととらえていた。さらに、*「看護師の洗浄方法をふまえ自分なりに考えた方法で実施できた」*など、『学生が考えた方法を優先してくれた』ととらえ、看護師の指導に対して【学生が主体的に実施できる指導だった】という思いを抱いていた。

(5) カテゴリー【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】

学生が主体となって実施する場面での看護師の指導に対しては、看護師による実施サポートを得てきたなかで、*「看護師のやり方に疑問があっても気が引けて聞けなかった」*状況だったことや、*「自信がないので自ら助言を求めることは緊張した」*ため、『学生が質問しやすい雰囲気が欲しかった』と振り返っていた。また、*「見守るだけの指導は緊張感が強くあまり考えられなくなった」*、*「緊張感が強い状況での看護師の無言は辛かった」*という自身の経験から『指導は言葉にして欲しかった』と振り返っていた。更に、実施中に*「留置カテーテル管理するようにと急に言われ緊張が増した」*、*「泡洗浄中に突然お湯をかける看護師の行為に驚いた」*など、『実施中に混乱した突発的な判断による指導だった』ととらえ、看護師の指導に対して【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】という思いを生じていた。

(6) カテゴリー【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】

学生にとって受け持ち患者に対する陰部洗浄を適切に実施していくためには、看護師からの実施前後の打合せや振り返りを必要とする。学生は、*「良かったから次も頑張ってという言葉があった時は嬉しく頑張れた」*、*「改善点ばかりを指摘された時は落ち込んで嫌になった」*など、『肯定的評価による助言が欲しかった』や、*「その日の振り返りもなく翌日に繋げられなかった」*、*「前日の助言からどう考えたのか実施前に聞いてほしかった」*など、『体験を次に活かせる助言が欲しかった』ととらえていた。しかし、その一方では、*「適切な体位保持方法であったかを一緒に振り返り納得した」*など、『実施状況をふまえた納得できる助言だった』ととらえており、学生はその日の実施状況をもとに翌日へ繋げていくためにも【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という指導に対する思いを抱いていた。

Ⅶ. 考察

今回、５名の学生に対するインタビューから、基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思いとして、看護師による陰部洗浄見学場面での指導に対する思いや学生による実施場面での指導に対する思い、更に、実施前後の指導に対する思いについて語られていた。この３つの視点をふまえ考察する。

学生は、２週間の実習期間のなかで受け持ち患者の陰部洗浄場面を１回もしくは２回見学した後、看護師の指導のもと３～４回実施経験していた。学内演習では、便器と防水シーツを使用した方法の練習を重ねてきた学生にとって、防水シーツを使わずにおむつ上で実施する臨床での方法は初めてである。更に、便失禁状態や膀胱内留置カテーテルが挿入されている患者に対する陰部洗浄は、学内で習得してきた方法を変更し応用していくことが必要とされるために困難性が高くなる。ゆえに、実習開始して間もない時期での看護師の実施状況を見学することは、学生にとって大きな驚きを伴う経験となっていたと思われる。三尾ら[14]は、学生は看護師の実施状況から技術や処置の基本的手順だけでなく、看護師個々の援助の工夫や独自の方法、援助中の配慮の仕方や手順の良さを学び得ることを明らかにしている。また、伊藤ら[15]も看護師と患者のやりとりを見学することでコミュニケーションの工夫や看護師としての姿勢などを言語化できると述べている。学生にとって、学内でのイメージ化が難しい患者に対する援助の気づき・発見が、【患者への適切な方法を学べる指導だった】という思いに繋がったものと考える。

しかし、その一方で、学生は看護師の手袋を装着しないもしくは２双重ねた状態での洗浄方法や、看護師２名で陰部洗浄と全身清拭を同時に実施していた状況等について患者の安全性や倫理的配慮の視点から疑問と葛藤を生じていた。また、学内で習得してきた便器使用による方法との違いを知り【方法の根拠について説明が欲しかった】という思いを抱いていた。木下ら[20]も、看護学生が臨床でのジレンマを経験した場面として、不潔な援助や流れ作業的援助といった看護師のケアに関することが最も多かったことを明らかにしている。

2002年に看護学教育の在り方に関する検討会（文部科学省）による報告「大学における看護実践能力育成の充実に向けて」[16]では、臨地実習指導体制の基盤づくりとして、優れた看護が実践されている状況や卓越した看護職者の存在そのものが最良の教育となると提唱している。基礎看護実習は、学生にとって自己が目指す看護師像を具体的にとらえていく機会でもある[17][18]ことから、学生にとってのロールモデルの存在となり得ることを意識し、エビデンスに基づいた臨床での方法について実践モデルとして提示していくことが必要と考える。

学生が主体的に実施した陰部洗浄場面での看護師の指導については、【学生が主体的に実施できる指導だった】という思いを抱いていた。陰部洗浄は、陰臀部の洗浄技術だけでなく、おむつ交換や寝衣着脱の援助技術や体位変換とポジショニング技術、スタンダードプリコーションによる感染予防技術に関する知識・技術が必要とされ、受け持ち患者の尊重と擁護に配慮した関わりが求められる。ゆえに、実施経験の少ない学生は、看護師の介助によるサポートにより共に実施していくことや実施中の具体的助言を必要としているため、『学生が上手くできるような介助や助言だった』や、『経験していないことへの意図的な助言と介助があった』等といった看護師からの指導は実施に伴う満足感や達成感となり、【学生が主体的に実施できる指導だった】という思いに繋がったと考える。

その一方で、学生は看護師による実施場面の見学を通して得られた学びや日々の看護師からの助言をもとに、主体となって受け持ち患者に実施していくことの難しさを実感していた。『自分のことで頭が一杯だったことを分かって欲しかった』という思いからも、学生は、患者の身体状態や反応を目前にすることで実施前の緊張感が高まり、実施するなかで戸惑いや焦りといった精神的動揺を生じていたと推察できる。中本ら[19]は、臨地実習における学生は自分が想定していたように効率よく看護援助を行うことができなかったことが実習での困難感となり、基礎実習においては成人実習に比べ有意に高い結果であったことを明らかにしている。

基礎看護学実習の学生は、患者とのコミュニケーションや援助方法に悩み、自分の知識や技術の未熟さを実感する状況にある[11][12]。このような学生にとっては、看護師の見守りによる言葉のない指導は実施時の焦りや不安や緊張を助長していたものと考える。また、便失禁や膀胱内留置カテーテル挿入中のおむつ上での洗浄、皮膚トラブルに対する軟膏処置を必要とする洗浄実施に伴う疑問があっても、学

生としての看護師に対する気兼ねから学生自ら発信できない状況であった。このような状況下での体験から、【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】、【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】という思いを抱いたものと考える。

学生は、自らの技術の未熟さを自覚しつつ、どうすれば患者にとって陰部洗浄に伴う負担を軽減でき適切な援助に繋がるかを常に模索していた。学内演習で既習した陰部洗浄の手順に加え、患者の状態に応じた方法に変更していかなければならない実習での陰部洗浄には、即時の思考や判断による実施方法の選択が求められることも多い。

ゆえに、看護師による実施場面でのタイムリーな指導だけでなく、実施前後の指導が必要とされる。学生の『肯定的評価による助言が欲しかった』、『体験を次に活かせる助言が欲しかった』といった看護師の指導に対する【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という思いからは、看護師からの肯定的フィードバック内容を励みとしてきたことが推察できる。学生が自己の課題を見出しながらもモチベーションを高めていくことができるよう、学生の心情に目を向け、肯定的なフードバックを返していく指導が必要と考える。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、インタビュアーが教員であるため、参加者である学生にとって教員に知られたくない内容は語りに出てこない可能性がある。また、研究参加者の背景として、陰部洗浄の実施回数が３～５回とばらつきが小さいことや受け持ち患者の背景も類似していることから、陰部洗浄を実施した学生の思いを十分反映したとは言い難い。今後研究参加者の数を広げていき、基礎看護学実習の特徴をふまえた臨床での指導について臨床との連携を図りながら継続的に検討を重ねていきたい。

Ⅸ. 結論

1．基礎看護学実習Ⅱで陰部洗浄を実施した学生の看護師の指導に対する思いとして、【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】、【患者への適切な方法を学べる指導だった】、【方法の根拠について説明が欲しかった】【学生が主体的に実施できる指導だった】、【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】、【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という６つのカテゴリーが抽出された。

2．学生は、看護師による陰部洗浄の見学場面を通して【患者への適切な方法を学べる指導だった】、【方法の根拠について説明が欲しかった】という指導への思いを抱いていた。また、主体的に実施した場面での看護師による指導に対しては【学生にとっての難しさを分かって欲しかった】、【学生が主体的に実施できる指導だった】、【学生の緊張感や不安に配慮して欲しかった】という思いを抱き、実施前と実施後の看護師による指導として、【学生の体験をふまえたフィードバックが欲しかった】という思いを抱いていた。

3．学生に対する指導として、学生にとってのロールモデルの存在となり得ることを意識し、エビデンスに基づいた臨床での方法について実践モデルとして提示していくこと、臨床での陰部洗浄を経験する学生の心情に目を向け、肯定的なフードバックを返していく指導が必要と考えられた。

引用・参考文献

1）岩根直美，水田真由美，坂本由希子，他：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の看護基本技術の体験と自信，和歌山県立医科大学保健看護学部紀要，Vol. 7, 69-76, 2011.

2）吾妻知美、前川幸子、重松豊美他：基礎看護学実習において学生が経験した看護技術の現状－「基礎看護技術経験⑥」の分析から－，甲南女子大学研究紀要，看護学・リハビリテーション学編，Vol. 4, 105-113, 2010.

3）井上美代江，今井恵，松永早苗，他：基礎看護学実習Ⅰ，Ⅱにおける看護技術の経験状況と課題，聖泉看護学研究，Vol. 3, 83-91, 2014.

4）市川茂子，澤田和美，中島正世，他：基礎看護実習における看護技術の経験と課題－本学の経験目標を設定した技術の分析から－，横浜創英大学紀要，Vol. 5, 91-98, 2009.

5）鶴田晴美，村上弘之，根岸京子，他：基礎看護学実習における看護義技術経験の実態，東邦医療大学紀要，Vol. 3, No1, 40-47, 2013.

6）坂田五月，佐藤道子，篠崎美恵子，他：分散型基礎看護学実習Ⅱにおいて学生が経験した看護基本技術の現状，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，No. 22, 27-36, 2014.

7) 細矢智子，佐々木美樹，山崎智代，他：基礎看護技術の演習における患者役割体験による学生の認識と心理的状態，つくば国際大学研究紀要，No14,　189-201, 2008.
8) 杉本幸枝，土井英子：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の日常生活援助の困難さの分析，新見公立短期大学紀要，Vol. 29, No.2, 19-24, 2009.
9) 水野昌子，福田博美：看護基礎教育における性に関する学習－セクシュアリティの視点から臨地実習における陰部洗浄の教育を分析する－，Bulletin of Education,（Educational Sciences），No. 61, 59-66, 2012.
10) 三尾亜喜代，曽田陽子，小松万喜子：臨地実習で看護学生が注意を向ける看護師の行動と見習いたくないと認識する行動，日本看護学教育学会誌，Vol.26, No. 1, 45-52, 2006.
11) 伊藤朗子，中岡亜希子，岡崎寿美子，他：早期体験学習の評価と学生の学びに関する基礎的検討，千里金蘭大学紀要，Vol. 6, 63-72, 2009.
12) 木下天翔，八代利香：看護学生が臨床実習で体験する倫理的ジレンマ，日本看護倫理学会誌，Vol. 8, No. 1, 39-47, 2016.
13) 看護学教育の在り方に関する検討会報告：大学における看護実践能力育成の充実に向けて，文部科学省，2002.
14) 大澤久美枝，長谷川真美：基礎看護学実習Ⅱを通して学生が目標と捉えた看護師像－インタビュー結果からの考察－，東都医療大学紀要，Vol. 7, No.1, 19-26, 2017.
15) 千田美紀子，今井恵，松永早苗，他：A 看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びの分析，聖泉看護学研究，Vol. 4, 47-54, 2015.
16) 中本明世，伊藤朗子，山本純子，他：臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較，千里金蘭大学紀要，Vol. 12, 123-134, 2009.
17) 滝下幸栄，岩脇陽子，松岡知子他：基礎看護学実習の評価と課題，京都府立医科大学看護紀要，No. 17, 93-99, 2008.
18) 川原文子：臨地実習における看護学生の失敗体験と学びに関する研究，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録，No33, 61-68, 2008.

Students' Perception toward Nurses' Mentorship of Perineal Care during the Fundamental Nursing Practice Ⅱ

OKUBO Hiromi, INAGAKI Junko

key words: Nursing Practice, Perineal Care, Nursing Students, Perception